

大芝遺跡発掘調査 現地説明会資料

令和6年(2024)11月30日(土)
(公財)和歌山県文化財センター

大芝遺跡は県内第2位の広さを誇る日高平野を流れる日高川中流域の右岸に形成された河岸段丘上に立地する、縄文時代の散布地として知られる遺跡です。昭和28年の紀伊半島大水害の復旧工事中に縄文土器や石器が見つかったことにより明らかとなった遺跡で、これまで発掘調査は行われていませんでした。

今回の発掘調査はほ場整備に伴うもので、5月から面積約10,000㎡を対象として実施しています。調査ではこれまで中世の溝や土坑、墓、縄文時代の竪穴建物跡や土坑、柱穴などを検出し、縄文土器や石器、古代から中世の土器や中世の鉄製短刀などが出土しています。

【中世の遺構】

・土坑 381…直径0.8～1.0m、深さ0.4mの円形の土坑です(写真1)。土坑の上部にはこぶし大～20cm程度の円形の川原石を並べており、鉄製の短刀(写真2)や少量ですが布のような繊維質の物質が出土したことから、墓と考えられます。ほかに中世と見られる土器の破片が出土していることから、中世において、調査地周辺には墓域が広がっていた可能性が高まりました。

【縄文時代の遺構】

・竪穴建物群…中世の遺構面(当時の人々が生活していた地面)から約0.3～0.4m下の土層で検出した建物跡です。直径5.0m程度の円形もしくは一辺3.0～5.0mの隅丸形状で、それぞれが非常に近い位置に密集していることから、何度も建物を建て直した様子がうかがえます。出土した縄文土器の年代から縄文時代後期(約4,400年前)の建物跡と考えられています。

・竪穴建物 2013…調査区の南端部で検出した直径3.0～4.0mの竪穴建物跡で、出土した遺物の中にはこの遺跡周辺で作られたとみられる土器のほかに、東海地方(岐阜県北部)や関東(千葉県)で出土する縄文土器も確認されています(写真3)。

また、他の遺構からは多くの縄文土器(写真4)サヌカイトと呼ばれる近畿地方では奈良県と大阪府境にある二上山から産出する石材で作った矢じり(写真5)や漁をするための網に付ける石製のおもり(石錘)(写真6)なども出土しており、縄文時代の人々がどのような生活をしていたのか考える貴重な資料になります。

【遺跡の評価】

大芝遺跡の全てが明らかとなったわけではありませんが、縄文時代後期に人々がこの場所で集落を営んでいたこと、また東海や関東といった地域からの土器が出土したことから、遠方の地域や人々と交流があったことがうかがえ、縄文時代後期における日高川流域の中核的な集落であった可能性が高まってきました。また、中世の大芝遺跡についても土坑墓が見つかったことから、周囲に中世の集落が広がっていたことが想定できます。



写真1 土坑 381



写真2 土坑 381 から出土した短刀

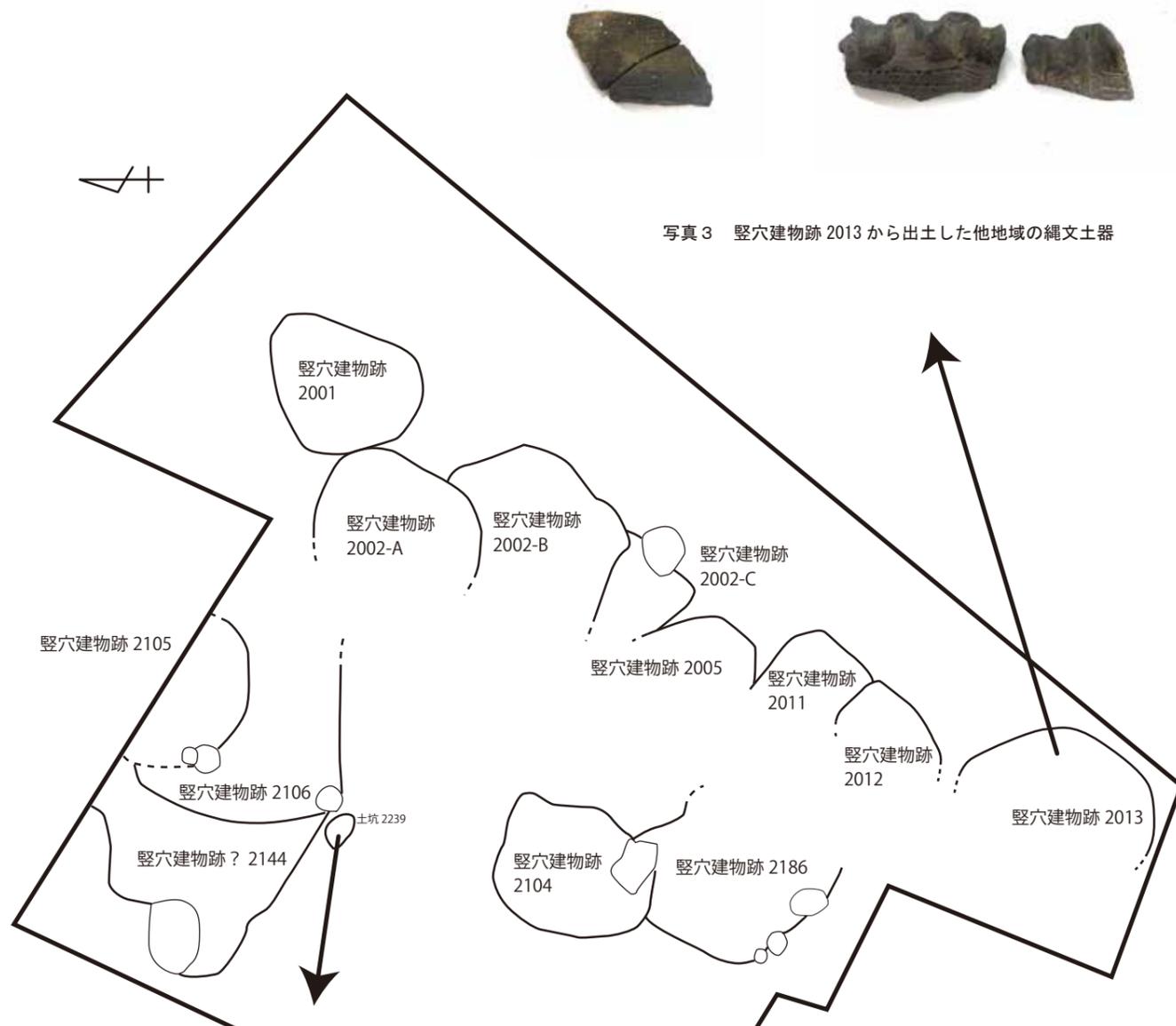


図1 大芝遺跡調査区2 第2遺構面 竪穴建物跡等の遺構配置図(略図)



写真4 土坑 2239 の縄文土器出土状況



写真3 竪穴建物跡 2013 から出土した他地域の縄文土器



写真5 (左): 石鏃 (せきぞく: 石でできた矢じり)
写真6 (右): 石錘 (せきすい: 石でできた漁で使う重り)